

鐘〈かね〉が坂（丹南町）

丹南町大山と柏原〈かいばら〉町との境にある大きな坂を鐘が坂といいます。ふるくから、桜とつつじの名所で、そのうえ、「鬼のかけ橋」とよばれる、たいへん珍しいものがあるので、丹波の人々は、鐘が坂公園といって、近くの川代公園とともに、したしんできました。

ところが、最近、桜の山を削〈けず〉り、つつじの谷を埋め、新しいトンネルを掘り、国道百七十六号線が公園の真中を通るようになって、面目が一新しました。

しかし、村の人々の中には、

「鐘が坂の公園がなつかしい。」

といって、桜やつつじを植える運動を起こしている人もあります。

この鐘が坂に、こんな話があります。むかし、むかしのことです。鐘を盗〈と〉った神を追うて、大山の追手神社の神が、この村まで追い込んだ時、日がとつぷり暮れて、あたり一面、まっくらになりました。

やっと逃げのびた神は、この峠に鐘を置いたまま、しばらく月の出るのを待たれました。

やがて、東の山に大きな月が出たので、

「ああ、出た、出た、大きな月が。」

といって、よろこびながら東の空を見上げられた時、折悪く、近くにあった椎〈しい〉の木から、実がひとつ落ちたのが神の目にあたり、いたくて、いたくて、目をあけることが出来ません。

神は、仕方なく、この坂に鐘を置いたまま、氷上郡の小倉に下り、「鐘の宮」になられました。それから、この峠を鐘が坂といい、その村いったいを、追入〈おいれ〉というようになったといわれています。

この事があってから、ずうっと、この椎の木には、実がひとつもならぬようになったと、いいつたえられています。

